



[令和 4 年 2 月 9 日 定例会発表要旨]

手稲で風になった人びと

手稲郷土史研究会 会員（相談役） 一ノ宮 博 昭

手稲の公営の墓苑は「手稲墓地」（手稲本町 4-4）と「山口墓地」（手稲山口）の二カ所だが、手稲墓地は、「死してもなお故郷を見渡せる場所に」と、先人がこの高台を選んだのだろう。

祥龍寺（稲穂 2-1）わきの小道を過ぎると火葬場（現存せず）までは直線で、大きな石を階段代わりに並べた急坂を、指定された若者が棺を担いで運び上げた。その後、荷馬車が使われるようになり、さらに現在の道路（手稲墓地線）が開削され

た。大きな葬儀が発生すると親族は白装束となり、近隣の者が総動員で葬式全般を手伝った。黒い喪服が一般的な今とは違い 戦前・戦中は白色が正装で、専門の葬儀屋が現れるのはずっと先だった。



白装束が正装だった昔の葬儀
（岡内義一氏 提供写真）

墓地というと湿っぽい話になりがちだが、痛快な話から始めよう。その昔、近所の“秋葉の婆ちゃん”が散歩の帰り、背広にネクタイ姿の男に声を掛けられた。「あのお、ヤキバはどこですか？」、「ああ、もう少し行ったら左に入る坂道があります。その突き当りです」。自宅に戻り、はたと考えた。たった一人で焼き場に行くなんておかしい。もしや、ヤクバ（役場）の聞きまちがいか。一文字違いでとんでもない方向へ案内してしまったという笑い話だ。

さて、“手稲墓地に眠る懐かしい人びと”について記そう。

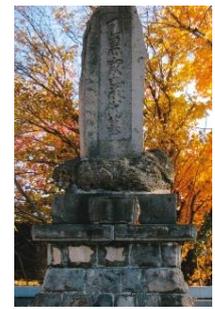
「養輪家之墓」—— 養輪早三郎氏は、手稲の町政を 5 期 20 年に亘り指揮した総帥。札幌市との合併に道筋をつけた人でもあり、思い出も多い。例えば、私の勤めた読売新聞が札幌進出した頃は読者も少なく、購読数を増やそうと始めたのが市町村の俗にいうゴシップを取り上げるキャンペーンだった。手稲も例外ではなく、鉄北小の立地場所に先輩記者が目をつけた。ゴミ捨て場で頭上には高圧電線が走り、水捌けも悪い。そんな場所に学校を新設してよいものか。すると町長からお呼びが掛かり、「なんで手稲っ子のお前が手稲の悪口を書くんか」と一喝。「いえ、これは私じゃ…」、「弁解するな。お前でなかったら誰が書く」。先輩の名こそ明かさなかったが、確かに私も議会の傍聴に通いつめては手稲についていろいろ書き、特ダネも掴んだ。たまたま町長と二人きりで車に乗り合わせたとき、「合併ではなく市に昇格という選択もあったのでは？」と問うたら、「お前は若いのお。人間ばかり増えても税金は誰が納めるんだ。家が一軒増えると、上下水道、舗装、幼稚園、学校もつくらにゃならん。市など成り立たん。もっと勉強せい！」と一蹴されたこともあった。

養輪氏は当初、合併を機に引退するつもりだったと聞く。しかし、周囲はそれを許さず、道議選に出馬することとなる。ところが、合併して間もない旧手稲町は全札幌を対象とする選挙区は不慣れだろうと、このときだけ石狩支庁を範囲とする変則選挙が実施された。皮肉にもこれが養輪氏の惜敗の因となる。つまり、選挙区を勘違いした無効票が多数を占めたのだ。もっとも、町長時代の名声に胡坐をかいてるくに選挙活動をしなかった取り巻き連中が一番悪いのだが、旧町民は非常に残念で悔しい思いを抱いたものだった。



養輪家之墓

「乙黒家累代之墓」——われわれが承知する乙黒定七氏は、襲名3代目。三樽別川の清流に目をつけ、菜種油などの製油所を開始したのが先代。元札幌市長の板垣武四氏をして「手稲の殿様」と異名をとったのが3代目だ。30代から村会議員に就任し、文字通り手稲の生き字引だった。手稲消防団の団長を50年に亘って務め、町議選では富丘地区を総ざらいする得票を重ねた。合併後も市議として活躍した。



乙黒家累代之墓

手稲中央小は、昭和59年に開校100周年を迎えた。これを盛大に祝おうと組織されたのが協賛会で、会長はもちろん、乙黒氏。私も卒業生の一人として組織部長を命ぜられ、ブン屋なのだからと同窓会の会報作りも任された。式典当日、会報は記念品などとともに配られたのだが、少々思い上がっていた私は、その記事を式典が開かれる一週間も前にさも盛大に開催したかのごとく書き連ね、そのまま渡したのだった。来賓控え室でこれを読んだ乙黒氏、「書いたのは誰だ」と言って、私を睨みつけた。板垣市長もニヤニヤしている。いよいよ本番、挨拶に立った協賛会長は「私がこれからしゃべろうとすることを、一ノ宮が先回りして書いてしまった。皆さん、この会報を読んでください」と締めくくった。何ともきまり悪く、私は受付へと退避した。若い記者の驕りだった…。

乙黒製油所は、これほど年輪を重ねていながら法人組織で運営されてはいなかった。全くの個人事業というのも珍しい。

「松井家累代之墓」——松井武市氏もまた、手稲の重鎮議員の一人。札幌市との合併調査特別委員長も務めた人物だ。



松井家累代之墓

墓誌を見て驚いた。「キテネ食品館」の初代社長が10代目の武市（本名：稔）氏で、私がお付き合いいただいた議員は9代目ということになる。本道においてこれほど代を経るのは説明しがたく、本州から移住して軽川に居を構えたとみられる。「亀甲マルゴ」の屋号で親しまれ、味噌・醤油の醸造業を主体としていた。しかし、大手の荒波には抗えず、その地に大型マンションを誘致。さらに生鮮・日用品を扱う「キテネ食品館」を開業し、現在は手稲本町商店街の中核店となっている。

「カネ長 本間農場」の名にちなむ道路が完通した際、私は「手稲町が合併するとき札幌市側に出していた将来要望は、ほぼ完了したとみてもよいか」と松井氏（9代目）に質した。これに対し「合併条件なんてもんはもう霧散した。細かく点検したわけではないが、手稲の人口増が予想だにしないほど急激だったので、当初予定の10倍くらいの資本投下があったはずだ」と語っていたことも懐かしい。なお、村議だった8代目の武市氏が議会で「手稲山一帯を道立公園に指定してはどうか」と提案すべく起こした草稿を、未公開のまま拙宅で保存している。

「竹内家之墓」——「勲七等故竹内静勝命 竹内よね命」と刻まれている。加賀藩有縁の「前田農場」の事務長として長年農場を監督し、『前田農場要覧』（大正9年）を著した竹内静勝氏の墓とみられる。「竹内牧場」（前田の竹内家とは異なる家柄）の初代か。牧場の閉鎖とともに一家は郷里の静岡へ引き上げたと耳にしている。



竹内家之墓

「村上家」——村上由氏は昭和48年、72歳で逝った。手稲でも稀にみる秀才といわれ、村議を1期務めている。

共産党についてはよく解説できないが、「白鳥事件」（昭和27年）が起きた頃、党は穏健派と武闘派に分かれていた。事件の首謀者とされた村上国治氏は、軽川の由氏宅で打ち合わせのち汽車で札幌へ向かい、市電に乗って伏見のアジトに潜んだとされる。裁判では、その移動に要した30分という時間を問う反論も出されたが、「不可能とはいえない」と有罪判決が下った。再審請求が棄却されたとき、当時の裁判長が記者懇談会の席上、「白鳥警部の射殺事件は真綿で丸くくるんだような事件なので、小骨の1本や2本抜いたところで真綿の全体像が崩れるものではない」と言っていたことを思い出す。実行犯とされ中国に逃亡した人たちは、はたして存命なのだろうか。

村上家で忘れてならないのが、村上藤吉の存在だ。明治のはじめに父親とともに来道し、定山溪周辺で湯番をしていたが、軽川に温泉が湧くと聞いて「藤遜舎鉱泉」（現在の「藤の湯」の前身）を開いた。軽川で威勢を誇り、藤吉の口利きがなければ店も出せなかったという。由氏は藤吉の養子になったとの話もあるが定かでなく、また藤吉の晩年もはっきりとはしていない。



村上家

明治22年、発寒で官林火災が発生したとき、部落総出で消火活動に当たった功勞に対し、道庁は60円の下賜を決めた。村総代の藤吉は「この金で学校を建ててくれ」と願い出、報奨を辞退したと伝わる。ある郷土史読本では「手稲の教育はヤクザが始めた」と記している。

「宮崎家之墓」——手稲に最も早く入植したうちの一人、宮崎宗右衛門（明治42年に80歳で没）は、筆まめで近所の面倒もよく見る好々爺だったという。稲穂神社の建立経過、手掘りの小川開削の願書をはじめ、未読を含む多くの古文書が今も木箱に遺されている。

圧巻なのは、死刑囚・藤井ナツ（またはハツ）の遺体を引き取ったことだろう。函館で指圧を生業としていたナツは重症者にモルヒネを無届けで用い、4人を死亡させた。発覚を恐れての隠遁だったのか手稲山の旧登山道に指圧所を開設したが、これが高い人気を呼んだことで逮捕され、苗穂刑務所で刑が執行された。たまたま自宅が宮崎家の近くだったので宗右衛門が引き取りを願い出るが、



宮崎家の4基の石像

その引き渡しの条件は、両肩からナワを十字にかけた石像を造るというものだった。そして本当に造ったという。

宮崎家の墓のわきに誰のものともわからない小さな石像が4基並んでいる。そこからやや離れた場所にも1基放置されており、随分古びて苔むしてはいるが、砂塵を払うと経文らしきものが浮かび上がった。噂によると、荒縄がここに巻き付いていたとか、いないとか。真相は不明のままだ。

「岡本家」の石碑——私が高校生の頃まで各家庭で飼育されていたウマは、労働力として極めて重要な存在だった。数多い墓碑の中でも、岡本家のように愛馬に敬意をはらったものは珍しい。一族の墓標のわきに建つ小さな石碑はウマの顔が彫られ、裏面には「墓石を運でくれた馬二頭に心から感謝込めて」※原文ママとある。



岡本家の石碑

「一ノ宮家之墓」——平成11年6月、それまで4基あった墓標を「一ノ宮家之墓」として1本にまとめた。古い墓石は土台に使った。

わが家の仏壇には、明治元年の死者を筆頭に24柱がまつられている。渡道の折、位牌だけを持参してきたのかもしれない。また、説明のつかない嬰兒や幼児、嫁いだ娘が里帰り出産し母子ともに亡くなったというものもある。さらには全くの他人まで含まれている。昔は「草鞋を脱ぐ」という風習があった。だれかれとなく面倒を見、寺への種々の届け出などもしていたらしい。私はかつて位牌をながめて「これはいったい誰なんだ？」と聞いたことがあった。しかし、母も祖母も「ウチにとっては大事な人」としか言わず、結局、墓誌に刻むのを諦めた。



一ノ宮家之墓
（上の写真は屋号）

墓標をまとめるにあたり、せっかくなので出入口に一ノ宮の屋号を入れた。「カネヤマニ」と読ませる。が、これを実用する場面は今のところない。

最後に、令和2年12月現在の市生活環境課調べによる「手稲墓地」の概要を参考までに記しておく。開設：明治10年代後半（正式記録なし）、区画数：541カ所、埋葬者数：3,039人（火葬2,945人・土葬94人）、新設数：0基、墓じまい：1基、管理者不明：153基。

手稲郷土史研究会 令和4年度 定期総会 ⇒ 令和4年4月13日（水）18：30～／手稲区民センター 3階 視聴覚室
※手指消毒・マスク着用のこと。体調がすぐれない場合は出席を控えてください。終了後に懇親会などは行いません。

▶ 運輸・通行の要所「サンタロペツ」…

富丘の地名は、昭和17（1942）年、手稲村の字名改正の際に「小丘ヲナセル地形ニシテ 地味肥沃 富裕ナル農村ヲ建設セントスル理想ニ依リ 名付タリ」と定められたものです。それ以前は「サンタロペツ」あるいは「サンタルベツ」と呼ばれ、「札幌郡手稲村大字下手稲村字三樽別」と表しました。北海道の名付け親ともなった幕末の探険家でのちの開拓判官 松浦武四郎が万延元（1860）年に出版した『東西蝦夷山川地理取調圖』には「タン子ウエンシリ」（アイヌ語で「長く歩きにくい断崖」の意＝手稲山）に源を発する川がいくつも描かれています。もちろん流路は現在と異なり 正確さにも疑問はありますが、「サンタラツケ」（アイヌ語で「縄でシカを縛り荷おろしするところ」の意）からの転訛が、古称の由来と伝わります。

富丘は古くから札幌と小樽、そして石狩をつなぐ運輸・通行の要所とされ、明治4（1871）年には開拓使によって、現在の二十四軒手稲通と三樽別川が交わるあたりに、「サンタロペツ通行屋」が置かれました。餅店や数軒の人家などもあったといわれますが、詳しい記録は残されていません。

▶ 札幌近郊の温泉観光のさきがけ…

現在の札幌自動車道の山側（富丘6条3丁目付近）に、かつて竜宮城に例えられた豪華な温泉旅館がありました。明治26（1893）年、小樽の商人 東幸三郎が開業した「光風館」です。行楽地として賑わった往時の様子が、『明治三十二年 札幌案内』に詳しく紹介されています。手稲山麓からの眺望のすばらしさ、四季折々の美しい自然に囲まれて楽しむ酒肴や料理、そして万病に効く泉質…etc. 定山溪でさえ宿が一軒という頃、まさに「光風館」は 札幌近郊の温泉観光のさきがけでした。昭和初期には、徳川喜久子姫（徳川慶喜の孫でのちに高松宮宣仁親王妃）も夏休みを過ごされたそうです。



「光風館」を紹介する大正期発行の絵はがき
（札幌市中央図書館 所蔵）

また「光風館」は、大正9（1920）年にシベリア出兵中の日本人捕虜が ロシア赤軍パルチザンに虐殺されたという「尼港事件」とも関わりがあります。事件の復讐と称してサハリン沿岸を荒らした海賊の頭目 江連力一郎が、この温泉旅館に潜んでいたところを発見され、大正11（1922）年12月、軽川駅前で逮捕されたのでした。「光風館」の名は、今も市道「光風館線」に遺ります。



富丘の“はさがけ”

（富丘連合町内会「富丘今昔」より）

▶ コメ作りが盛んだった富丘…

現在は住宅がひしめくように建ち並ぶ富丘も、昭和40年代までは農業の盛んな土地柄でした。昭和17（1942）年に改称された地名にも、「作物が豊かに実る丘」という当時の人々の願いが込められています。

コメ作りがこのあたりで本格的に始まったのは明治中期で、最初の水田は三樽別川流域にあったといわれます。刈ったイネを乾かすのに、富丘では独特の方法をとっていました。田んぼや畦に1本の棒を立てて根元から30～40cmの高さに横木を渡し、その上にイネを2束ずつ交互に重ねて手の届く限りまで積み上げたものです。これが 圃場一面に立っている様子はみごとだったそうで、富丘の秋の風物詩でした。

【編責：広報部】

* 手稲区役所1階の「手稲歴史資料展示コーナー」に掲示のパネル原稿より、一部転載しました。参考文献：札幌市『手稲町誌』、富丘連合町内会『富丘今昔物語』、札幌市立手稲中央小学校『郷土誌 がる川』、札幌市教育委員会『新聞と人名録にみる明治の札幌』、同『さっぽろ文庫1～札幌地名考』、同『新札幌市史機関誌 札幌の歴史』第25号・第26号、札幌市手稲区『手稲でみつけた手稲のはなし』、関秀志『札幌の地名がわかる本』、ほか。